



ヒヨコのわき道

ほら、君もこっちに いらっしやい

「第9回 クジラはやっぱりカバだった？ 不思議な海の獣たち

「クジラは魚ではなく、哺乳類ですよ」

クジラ、イルカの仲間は、とても人気のある動物です。特に水族館のイルカのダイナミックなショーは、大人気ですね。彼らが魚類ではなく、空気を呼吸し、子供を妊娠・出産し、生まれた子供に乳を与えて育てる「哺乳類」であることは御存知ですよ。今回は、哺乳類でありながら、海に戻っていった獣のひとつ、クジラ、イルカ達を眺めてみましょう。

「半分眠るのではなく、半分ずつ眠る？」

彼らの不思議な能力のひとつは、睡眠の仕方にあります。

海中でぐっすりと、私たちのように眠ったら溺れてしまいますが、彼らは眠らないのかというと、そんなことはないのです。ではどうするかというと、イルカは驚くべきことに「左右の脳を交互に眠らせる」のです。これは「半球睡眠」と言われる眠り方で、イルカを観察した結果では、交互に片目をつむって円を描くように泳いでいるのが眠っている状態で、約1分間の眠りを、1日に350回ほど繰り返すようです。

合計で6時間程眠っていることにはなりますが、まあ何とも落ち着きの無いこと。布団にくるまって横になり、ゆっくり眠れる私達ヒトは幸せなのかも。

「超音波で物を見る？」

彼らの能力で注目すべきなのは、「エコーロケーション」と呼ばれる能力です。これは自ら超音波（声）を発信し、周囲の物体から跳ね返ってくる反響を聞くことで、まるで目で見ているかのように周囲を把握する能力です。しかも、目で見える場合は対象が硬いか、柔らかいかなどの材質の違いまではわかりませんが、エコーロケーションではそれも可能なようです。

同様の能力は、コウモリにもあることが分かっていますが、問題はクジラ、イルカ達が水中に居ることです。音波の速度は、空気中では340m/秒程度ですが、水中ではおよそ1500m/秒と、遥かに速く伝わります。このため私達ヒトは水に潜ると、左右の耳に届く音に時間差が無くなり、音の方向がわからなくなってしまうのですが、クジラ、イルカ達は下顎の左右に特殊な組織を持ち、耳ではなく下顎で聞くことで問題を解決しているようです。

超音波だけでなく、音声は仲間同士の連絡にも使われていて、水中では目でせいぜい100m程度しか見通せませんが、彼らは何百キロも離れた仲間と交信できるよう。大型のクジラの仲間では、ヒトには到底不可能な広い音域を使い、何時間にも渡って「歌う」ことが知られています。集団によって「方言」らしき違いもあるそうです。さすがにその意味までは、良く分からないのですが。

「クジラさん、どこから来たの？」

彼らのもう1つの不思議は、彼らの祖先がどんな獣だったかです。通常、脊椎動物の骨格を観察して他のどんな動物に縁が近いかを調べるとき、大切な手がかりになるのは歯の形と、前後の脚、特に指の構造です。ところがクジラ達の歯は、ハクジラの仲間では単純な円錐形で、ヒゲクジラに至っては肝心の歯が無い。前脚は5本の指に支えられたヒレに変わってしまい、後ろ足は全く消失し、体内に埋め込まれた痕跡があるだけ。全て水中生活への適応を示す特殊化で、これでは他の動物と比較のしようが無い。

陸上から水中生活に移行する段階の化石も、満足なものは見つかっていませんでした。クジラ、イルカ達は、長年独立したグループとして、「クジラ目」に分類されてきました。

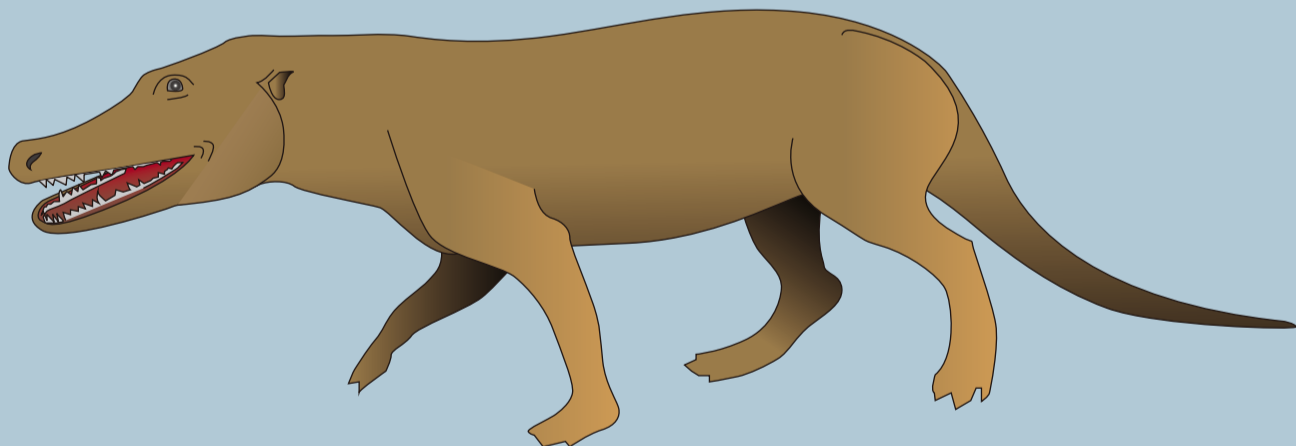
それでもわずかな手がかりから、クジラ、イルカ達は、絶滅した陸上の肉食動物、「メソニクス」に近縁とされてきました。メソニクスは、オオカミか、ハイエナのようなプロポーシオンの動物で、骨格を見たところで、とてもクジラに縁があるとは思えません。

ところが、近年のDNA解析の結果、現在生きている動物の中では、クジラ、イルカの仲間は、カバが最も近縁であることがわかってしまいました。カバは、ウシ、シカ、ヤギ、ラクダ等と共に、「偶蹄目（中指と薬指に体重をかけて立つ獣達）」と呼ばれるグループに分類されてきましたが、あーさあ大変。専門家間で激論が行われ、新聞やテレビ、雑誌でも、よく報道された騒ぎとなりました。

一方で、クジラの系統の化石動物も、保存の良いものが発見されるようになり、パキスタンで見つかった「パキケタス（パキスタンのクジラの意味）」は、陸上を歩く立派な四肢を持つことが分かり、やっと他の動物と指や肢の構造を細かく比較することが出来ました。最も参考になったのは、現在のクジラでは完全に失われている「踵（かかと）」の構造だったそうです。

結局「クジラ目」は、丸ごと偶蹄目のカバに近い枝に接ぎ直され、メソニクスは、蹄のある獣全体の根元近くに接ぎ木されました。グループ全体の名前も見直されて、「鯨偶蹄目」と呼ぶことでなんとか落ち着きました。これは動物の分類学史上、最大と断言していい事件です。

パキケタス



「では、その心は？」

あるヒトに慣れた1頭のチンパンジーが大病を患い、身体を奪われ、寝たきりの生活になってしまったとき、必死に看病していた周囲の人々は、ある奇妙なことに気付いたそうです。これがヒトの場合だったら、痛みのような辛い症状が治まっている場合でも、とても暗い気持ちになったり、将来を悲観して思い悩むのは仕方が無いところでしょう。ところがそのチンパンジーは以前のように周囲にいたずらを仕掛けたりして、全く悲観的な様子が無かったそうです。つまり、身体が不自由なのは良く分かっているはずなのに、落ち込んでいるようには見えなかったと。

それは何故なのか？チンパンジーが「愚かな動物」だからではなさそうです。ヒトではないチンパンジーの心の中には、どうも「明日」というものが無いらしいのです。言い換えれば、「常に、ただこの瞬間を生きている」と。だから身体が不自由になった自分の将来を憂うことも無かったのだと。

ヒトに最も近い（DNAは99%同じ）動物であるチンパンジーでさえ、こんなに「心の持ちよう」が違うなら、もっとはるかにヒトから縁の遠い、カバに近い獣から進化したクジラ達は、ヒトより巨大な頭脳で、「半球睡眠」をこなしながら、一体どんな心を持ち、何を考えているのでしょうか？

私達ヒトとは、全く異なる「意識」を持っているのでしょうか？

異なるとしたら、それはどんな意識のありようなのでしょう？それをどうやって調べれば？

いや私たちに全く違う意識など理解できるのでしょうか？

例えば、水中で何時間にも渡り歌うクジラ達ですが、その内容は実用的な家族や仲間への呼びかけや、繁殖のための恋の歌ばかりなのでしょう？

やはりそこに「明日」というものなど無く、明日を憂う哀しい歌など、世界中のクジラ達は誰も歌わないのでしょうか？